

校長室だより～和光高校今昔 第26号 H26.10.31

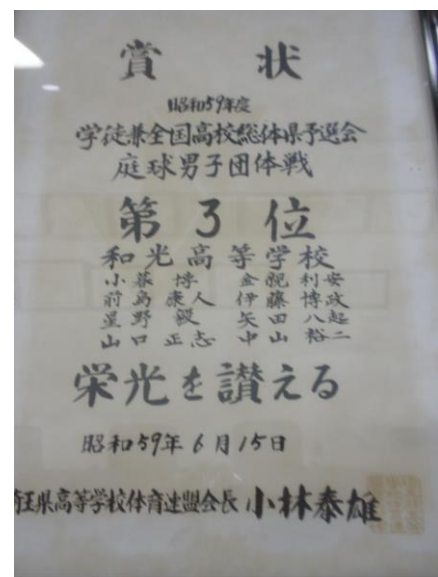
埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

ソフトテニス部（男子）の快進撃

埼玉県の男子ソフトテニスのレベルはかなり高い。例えば3年前の智光山で行われた関東大会では、上尾・川越東、松山が1位から3位まで独占するなど県勢が関東を席卷している。今夏もインターハイに出場した上尾高校は、部員たちが丹精を込めて整備する7面のコートと日本指折りの顧問による最先端の指導に加え、世界一を勝ち取った菅野創世・上原絵里選手など一線級OBたちが頻りにコートに顔を出し、意欲に溢れる部員達を指導している。まさに公立高校の部活動の理想像がここにはある。そのような学校と対極に位置していたのが、昭和50年代の和光高校男子ソフトテニス部であった。

そもそも男子「軟式庭球部」は、名伯楽大久保博康教諭とようやく完成した4面のテニスコートを待つ形で、昭和49年から本格的にスタートした。しかしながら大久保先生転出後は女子顧問榛葉先生の助言を仰ぐ程度で生徒たちの自主的な活動を余儀なくされていた。今以上にソフトテニスが盛んだった当時は川越東・越生などの私立勢の台頭こそまだであったが、上尾や川口・滑川に加え旧制中学の伝統校が凌ぎを削っているまさに群雄割拠の時代であった。

和光旋風は昭和57年の新人戦から始まった。内田・畔柳組（10期生）が強豪校を押しよせなんと3位に入賞する。このことに驚いたのは強豪チームの監督たちであった。なにしろ練習試合すらほとんど組まれなかったものでその存在は全くのノーマークであったはずだ。この時の和光の顧問は関根一紀先生、まだ3年目の若手教員のデビューであった。58年の新人戦でも小暮・金親組（11期生）が3位になる。前年に続いての入賞は各校の脅威となった。反面、研究や対策も練られるため内田・畔柳組は3年生の大会では不本意な結果に終わった。同じ轍を踏まないと誓ったこの代は、翌59年の関東大会予選でも個人3位となり小暮・金親組は初の関東大会出場を果たす。そして続くインターハイ予選団体戦で全国の舞台を目指した。インターハイ予選はベスト4から総当たりのリーグ戦になる。この年は大激戦で松山・熊谷・和光が2勝1敗で並んだが、ほんのわずかな差により3位となり涙をのんだ。団体入賞は初めてであり喜びはもちろんあつ



たが、限りなく全国大会に近づきそして逃した落胆の瞬間でもあった。ちなみに、個人戦では前島・伊藤組（11期生）が秋田インターハイの出場権を得た。そしてこの時の団体メンバーに1つ下の代の矢田八起さん（12期生）がいた。

現在47歳、株式会社日本リサイクルソリューション代表取締役を務めている矢田さんが校長室を訪ねてくださり当時のことを話してくださった。

「本当にテニスが大好きでした。練習が終わってもみんなで坂下ショッピングに寄り焼き鳥とチェリオで練習内容とか戦略について遅くまで語っていました。逆に言えば自分たちで考えることが当たり前になっているので、ピンチの時や勝ちきる時に前衛後衛の意志が合致し、信頼も強まっていったのだと思います。上手い選手ではありませんでしたが、2年の春から、絶対に退かず常に大きな声を出しているという理由で先輩から前衛3番手に抜擢してもらい団体戦に挑みました。結果は本当に残念な3位、あと一步でタイトルとインターハイ出場を逃しました。悔しさから翌日からはひたすら走りました。それまでも3分台で走っていたBコース10周が3年の時には2分台で走れるようになりました。テニス部ではBコースインターバルという地獄の練習もあり、とにかく走ることにかけてはどこにも負けない自信がありました。やらされた練習は一切なく、自分たちで決めた練習メニューをしっかりとやり遂げることが日々のモチベーションにつながり力を付けていったと思います。



私は親から高校でかかる費用は全部自分で捻出するように言われていたので新聞配達を続けながらの部活でした。指導者がいないとか時間やお金も足りないというハンディキャップこそが頑張ってこれた原動力であったと今では思います。幸い同期の山口君（新座四中出身）と組んで3年生の時に県3位となって能登インターハイに出場することができました。当時全盛の中京商業ペアと対戦し、普段の力を全く発揮できないまま破れてしまったことが唯一の心残りです。」

矢田さんは、和光市ソフトテニス連盟の理事長を長く務められ、現在も母校である大和中学校ソフトテニス部のコーチをされている。一つのことに打ち込んだ高校時代があっただけこそ、起業して今の自分があると熱く語ってくれた。最後に和光高校生徒にこれだけは伝えたいという言葉を送った。

曰く「Bコースは人を強くする」